

新潮文庫

幼年時代・あにいもうと

室生犀星著



新潮社

娘 と 私



定価 200 円

新 潮 文 庫

昭和三十六年七月十五日 発行
昭和四十一年十二月十日 十八刷

著 者 獅 子 文 六

発行者 東京都新宿区矢来町七一
佐 藤 亮 一

発行所 東京都新宿区矢来町七一
株式会社 新 潮 社

電話東京二六〇局一一二(大代)
振替 東京 八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷・大日本印刷株式会社 製本・憲專堂製本所

© Printed in Japan

新 潮 文 庫

幼年時代・あにいもうと

室 生 犀 星 著

新 潮 社 版

738

目次

魚と公園.....	七
香爐を盗む.....	二九
桃色の電車.....	六三
聖院長.....	七七
近江子.....	九九
あにいうと.....	一二一
幼年時代.....	一五七

解説 乾直恵

幼年時代・あにいうと

魚と公園

私ははじめ四五人の頭ごしに、蒼白い細々しい噴き上げが絶え間もなく登るのを眺めてゐたが、そのうち一人去り二人去りして、いまは一間四方ぐらゐにしきられた瀬戸煉瓦の水盤と私だけが寂しく對ひあはせられたのである。いつもこの雑園の公園に私はよくやつて來たけれど、あるひは活動寫眞や、または他の見物にいそがしく、いつも素通りしながらも何日^{いつ}はゆつくりと眺めたと思つてゐた。いつも水盤をとりかこむ人と人との隙間から、通りすがりに疲れたやうな蒼白い水面の一部と、幾つかの魚の頭などをほんのちらと目に映したにすぎなかつた。さういふ僅かな印象が家にゐて仕事をしてゐるとき、または街頭を散歩してゐるときや、電車の人混みに揉まれてゐるときなどに、ふいに浮んで來て、沈んだ靜かな世界を考へさせるのであつた。

私はいまや鮒や鯉や鰻のこりこりした、どこか齒痒い、それでゐて滑つこい頭が、みな一齊に、た、た、た、……と水面をたたいて落ちてゐる噴き上げのはうに伸されてゐるのを見た。一樣に、ぬらぬらした冷たいこれらの生きものは、ぼんやりと物忘れしたやうな顔つきで、新しい飛沫に打たれる快い恍惚にひたつてゐるらしく、わけてもその悲しげな藍いろの眼は、噴きあげの登るにつれて、何時までも睨^{にら}と一ところを熟視^みめ暮してゐるやうであつた。それがまた不思議に一疋づつの眼が、うす氣味悪く横目をしながら水中のなかから私をそつと窺うてゐるやうでもあつた。

——客はそのとき二人きりしかなかった。東京近在から出て來たらしい毛布をかぶつた百姓らしい男が、ぼんやり立つてゐるのと、もう一人は輝を切らした赤い手をした何處かの商店の小僧らしいのが、短い釣竿のさきから垂れた絲鉤を、ぐいぐい、たぐりつけては鮒でも鯉でも手あたり次第に引つかけてゐた。いらいらしげな小僧の失敗は、その面を赤めたが、水中の生きものはみな悠然と澄み返つてゐた。

魚はみな懶げな疲れた力のない、のろのろした泳ぎやうをしてゐた。彼の小さい鋭い錨のやうな金屬の一端がからだに觸れるごとに、彼等の鎧ひつくしたやうな正確な鱗の一枚一枚が、神経的にがちがち震へ、さうしてその眼は深くいたいたしげな哀しげな色をたたへた。たうてい、吾人間には聞きとりがたい悲鳴に似たやうなもの、たとへば、どこかねずみの鳴きごゑに似た細い絲のやうなものが、私の耳に打ち囁かれてゐた。幾十度となくおびやかされた釣針の痛みは、そのおどおどした臆病げな鮒の目つきのなかにも、いつころとなく不意に驚く癖のついた鯉のひれやかからだにも、むしろ蒼白くいららしげに筋ばつてあらはれてゐるやうであつた。その藍と黒とをこき交ぜた額や肌のあたりのぬらぬらしてゐるのを見ると、それが決して凍^{しも}みついたやうな冷たい生きものとは思はれなかつた。なにか知らぬかいもののやうに思はれるのだ。

ふしぎなことは鯉にしる鮒にしる、その額のところ^{ところ}に古い古い時代からの、何か意味深い象形文字のやうなこりこりした疣のやうなものがあつて、それが妙に私にある時代^{時代}にこれらの魚族が受けたあやしい象徴的なふしぎな歴史を考へさせた。

「おれはこの魚を見てゐるうちに、ふしぎに十年も前にかいた詩をおもひ出す。古い池や河のほとりに住んでゐる魚をおれは幼ない頭で神祕に近いものに考へた。いつの時代でもない或時代に彫りつけたものがゐるやうな氣がする。頭のごりごりしたところに古い時代の或人間の名が刻まれてゐるやうな氣がする——」。

など取りとめもなく考へた。

かれらはふしぎに、その一疋がうごけば、みなその動きを波のやうにつきからつぎへと受け継いで、しづかにゆつくりと、前なるものは後の魚に、一列なり二列なりになつて寸隔の隙間もなく、みな言葉をよみ合つて勢ぞろひをして泳ぎまはるのであつた、かかる無心でしかも深い動機によつた物悲しげな素直さが、その尾や鰭の上におつとりと品よく、しかも凜としてあらはに盡されてゐた。

百姓も小僧も去つていつたあとに、活動街へ向つて今電車を下りたばかりの人々が、しきりなしに騒々しい樂隊の音のするはうへ、いつ絶えるといふことのない不規律な行列をつづけてゐた。貧しげな下駄の音や靴の音、すそ短い少年ら、または紅いなまめかしい裾さばきしながらさし覗く白い脛の一部など、一齊に影繪のやうにこの水盤の方から眺められたのである。しかもまだ冬の残る寒げな午後の日ざしに光り外れた、活動館の廣告の旗や看板の紅い彩色の反射が、ちらちらと一つ一つの波の高まりに映つてきて、また、そつと虹のやうに消えて行つた。

魚は沈んでは、またぼつかりと浮きあがつて、悲しげに水のない世界を見上げ、口をあけたま

ま水と空氣とを半分づつ、はかなげに小さい呟きをやりながら吸つてゐた。また、或ものは嘖き上げに打たれたまま、ちつと樂しげに永い間動かうともしなかつた。あるものは底ばかりに頭をつきつけて、蒼白い瀬戸煉瓦にからだを擦りよせ、妙に身悶えをしてゐるやうだつた。——私はかうして永い間ゐるうちに心があまりに靜まり返つたことに氣がついた。水中の世界のふしぎさより、その私どもとはあまりに離れすぎた生きものを感じ過ぎたためであらう。しかし心には冷たい寒さがひえびえと襲うて來た。

「おれは何時も魚の形を珍らしく眺めた。幼少のころからさかな屋の店さきに冷たく投げ出された鯛や鰈や鰯や鮒や、または纖細で美しい白魚、せんだんの枯葉のやうなさよりや、さういふものが雜然と、しかもみな青い目を空のはうに向けて陳べられてゐることに、いつも水中に不斷な、いろとりどりの形をした魚族の「春」があるやうに考へてゐた。しかもそれらの奇怪な形態が吾吾人間の裸體と、實によく似た姿をもつてゐること、妙に腹部のふくらみ上つたところや、肩さきともおぼえるあたり、または肉體が尾とわかれてゆくところの細いしなやかさなど、吾々のものに近いことを感じしめるのだ。しかも一切の魚類のもつ冷却^{つめた}さと、やさしい重みを媚びさせる掌の觸り、さういふものの一切が吾々と親しい形態の上に引きつづいたプリミチブな思ひを寄せてくる……。」

私はひとりでかう考へながら、そろそろ水盤のほとりを離れた。いま一度目をとめると、かれらは同様のぬらぬらした姿で、くろぐろと列をつくつて泳いでゐた。

私は活動館の街をつくつてゐるあたりをぶらぶら歩いて行つた。ここの空は兩側のせせつこましく打ち建てられた高い建物に挟み上げられたやうに、深く高く或は小さく見えた。林立された惡どい流旗が一齊にひらひらしてゐるなかに、私ははしなく「水中の春」と題された映畫の寫眞を見いだした。すぐ私はポケットから幾らかの入場料を拂つて、さきから引續いたものを眺めようといふ愉しい心持になつて、しつとりした階段の敷物の上を登つて行つた。

私はなるべく隅の方の椅子にもたれて、ふと映畫のうへに眼をやつたとき、そこにすぐ王宮の大廣間がうつし出されてゐて、その廣間のまんなかに純白な大理石に疊み込まれた廣大な水盤があり、そのまはりには四個の圓燈が煌然とかがやいてゐるのが、晝間はやや蒼みをふくんでゐるらしい透明な水の上に、四つの美しい燎々とした影をおとしてゐた。しかも一つ一つの小さな波が穂立つてゆくごとに、星ぞらを仰ぎ上げるやうな、きらきらした無數の光がしかも微塵に碎けてゐるやうであつた。すべて水盤のまはりは彩色された石造で打ち鋪かれ、まるで磨き立てたやうな輝きと清潔さをもつてゐた。さうした正面に厚い柔かい無數の高貴なクッションをもつて覆はれて、それらの一つづつのクッションに浮きでた濃細な刺繡の花や鳥などの模様が、ところどころの金絲銀絲をかがやかせ、その上にすんなりとした白魚のやうな裸形の女が、同じくつらなつた寢臺の或は大雪のやうに盛りあがつたクッションに埋れて、あたかも深々と睡り込んでゐた。その幾人とも數へきれいな輕羅をまとうた女や、また宛然で裸形な女の背後には、一人づつ

の黒色人種の女奴隸が、ゆるく、ふうはりとした足なみをそろへた孔雀扇をもつて、しづかに涼しい夜風を送つてゐた、その柄の長いぴかぴか光る孔雀扇が、あたかも大きな怪鳥のやうな翼を空中に翻すほかは、その寢室の床に敷かれた毛皮類の毛なみを揺るばかりで、森とした晩方の青白い背後の玻璃窓をさしのぞく月光のみが、静かな熱帯の空に昇つてゐた。

さうした映畫を見てゐるうちに、はじめ餘りに水面に寫る蒼白い陰影が、その圓燈の光にくらべて透明すぎるやうに思はれてゐたのが、はじめてその天井が全部の玻璃張りになつてゐて、そこから夥しい月光が射してゐて、鱗のやうな波の穂をつくつてゐるのに氣がついた。なほ能く見詰めたとき、その大理石の彩色された床のところどころにある青々とした花實の臺の下に、幾人ともなく眞白な裸形が、美しい自由な睡眠をむさぼりながら、あるものは十字に、あるものはNの形に算をみだしながらゐるのを私はまじまじと眺めた。それらの一切の静止された一瞬がまたたく間にくづされた時は、その水盤を目がけて一人づつの美しい女が、殆同時に水中に飛び込んだ時であつた。青みをふくんだ水面の上には、倏ち^{たちま}に殆寶石を鑲めたやうな光りある波が粉碎されたあひまをあたかも白い重みのある肉體が、あるひは平たくなり、あるひは瀬すちを登る鋭い鮎のやうに、ひらりひらりと蒼い波を負つたりして泳ぎ廻つてゐた。あるものは、いきなり水中にもんどり打つて、美しい足と腰部の一部を現はしたかと思ふと、もう、その層をつくつてゐる水のところ蒼く沈んで行つたりした。また水面に浮んだときの肉體の光が、をりからの玻璃天井を透して注いでゐる月光に、ただ、複雑なちらちらした輝きを、小さい波の一つづつにまで投影する

のであつた。

それらの映畫中には絶えず美しい幻想曲が、或は水面にまつはるやうに彈かれたり、うつと里した睡氣をもよほさせるやうに低く聴覺を撫でたりしながらゐた。

「おれは嘗つてかういふ美しい世界を見たことがない。かういふ世界がたとひこの詩劇のやうな映畫にあらはれてゐるといふだけでも、これが寂しい活動寫眞のとりとめもない一つのシーンであるにしろ、おれにとつて何といふ高貴な美しい心を有たしてくれるだらう。——私だちは春さきの浴場のよごれた番臺で五錢の白銅を拂つて、あたたかい湯壺のなかにひたつて、ときどき吾の異性の肌をうつ下僕や、その小鳥のやうな囀りや、湯のばちやばちや鳴る音などを聞きながら、それらが國禁の外壁をめぐらされてゐるに拘らず、どれほど深徹な快樂と惱ましい妄念とを驅らしめることであつたらう。そつと眼を閉ぢると、さういふとき浮ぶものは櫻の花弁のやうなもの濡れかがやいた姿と、その濡れた花瓣の重い厚みと、それらが絶え間もなくする運動の美しさだ。私はそこに靜かにさしてくる日光をさへ幸福なものやうに、好ましいやうな心で眺めるのだ。あるときの私は其處にただ何事も忘れはてたやうな姿で、ありありと自分自らの悲しげな裸體をながめた。その手や足には、もはや滑らかでない青春期の終りを意味する瘦せかたや、決して光ることのない落ちゆく肉體の影さへ見ることができるのである。」

「私は私の腕をひろげて眺める。あるひはその大腿の一部を見詰める。さういふ次ぎの瞬間には私は悲しみ歪んだ顔つきと、まだ見も知らない人々にこの肉體を見られることを恐れた。私はそ

つと隅のはうに一つの桶をもち、一枚のタオルでからだをつつみ、さうして私はいつか少年時代に自分自身の肉體のうちにこつくりした美しい色白い足を眺めたときをふりかへつて見る。自身自身のなかにさへ、肉感を肉感するナキイブな子供らしい、戀を戀した心をふりかへつて見るのだ。」

「私が湯壺にひたつてゐるときは、もう老いた龜のやうな、悲しみ亂れた荒い粗雑な線をしか持たなかつた。一つの優しい秀れた線もいまはからだの何處にも現はれてこなかつた。肘のところにあつた靨も、太腿にあつた滑走しやすい辻つこさも、もうその影ををさめた。一切は筋と皮と骨とだけにさらされつくされたやうになつて、ときにはぼつきりと折れやすい燐寸の棒のやうにさへ眺められるのだ——。」

私はかう考へると、私自身が忌はしい骸骨のやうに思はれて慄然とした。そのとき、水盤の女人らは一さいに廣い大理石の床の上に飛び上つた。それらの幾十人と數知れない纖裸を滴る雫は、たらたらした香水のやうになめらかに腕や肌をつたうて、みる間に床の上を濡らした。さうかと思ふと、それらは總て眞珠をつらぬいた首飾りのやうに、長くしなやかな手をつなぎあつて、一さいに、輝き出すやうに白い波をうちはじめるところ、嚙喰^{オーケストラ}たる管絃樂がさながら荒い海濱の風浪のやうに起りはじめた。かれらの總ての足のさきが、その音樂の微妙なタイムのなかを織つて、あるひはソロバンの目玉のやうに規則正しく空にむかつて擴げられたり、または眩ゆいばかりの光のなかを車の輪のやうに舞ひはじめられたりした。一人づつの唇は微笑をふくみ、一人づつの瞳